# 焼岳の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震活動が継続しています。GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。山頂付近の噴気の状況に変化は認められません。
山頂付近の地震活動や地殻変動に加え、焼岳周辺では数年おきに震度１以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられるなど、中長期的には火山活動の高まりがみられますので、引き続き今後の火山活動の推移に注意が必要です。
山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

## ○ 活動概況

**・地震の発生状況（図１－②③、図２、図５－④⑤、図８～10）**

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海抜０km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています。

火山性微動は観測されていません。

【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に推移しました。

**・噴気など表面現象の状況（図１－①、図３～４、図５－①～③、図 11）**

噴気活動に特段の変化はありません。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約４km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約 2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約 2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも 100m以下で経過しています。

**・地殻変動の状況（図１－④～⑥、図６～８）**

GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。

傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

---

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、東京大学、名古屋大学、京都大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。
資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

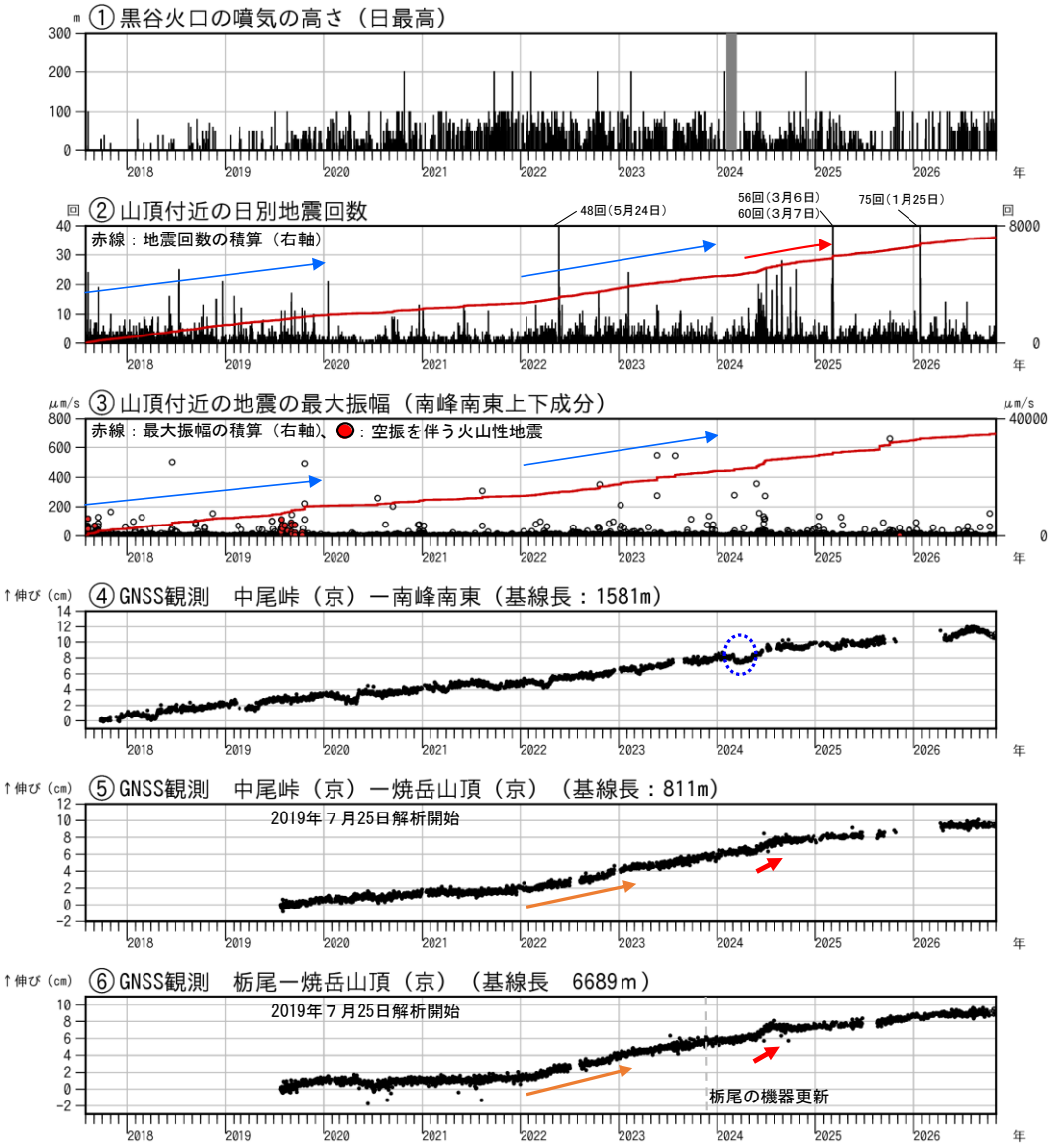
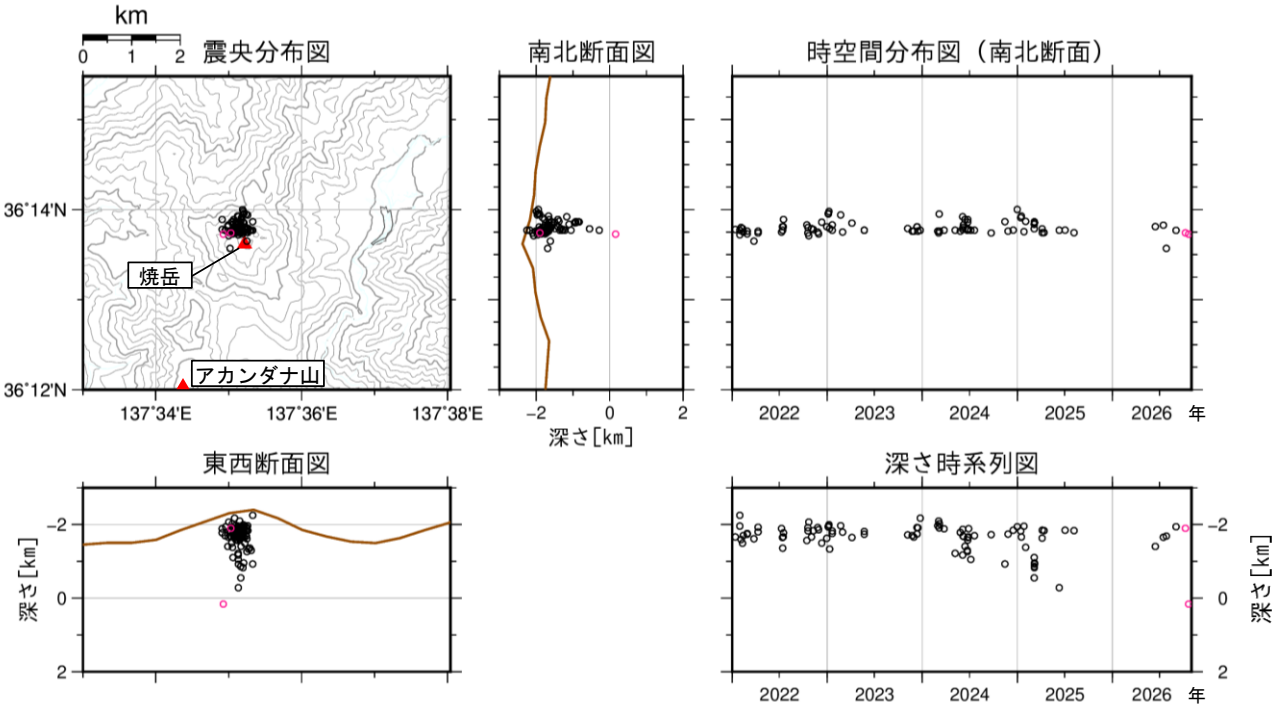



図１　焼岳　火山活動経過図（2017年８月１日～2026年10月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 1.0μm/s 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海抜０km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図２も参照。
①灰色の期間（2024 年２月５日～３月 14 日）は欠測を示します。
④⑤⑥は図７の基線⑥⑧③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。
④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

・黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えています。
・山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海抜０km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています（②）。
・2022 年１月頃から 2023 年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017 年８月から 2019 年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。2024 年５月下旬から 2025 年３月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。2026 年１月下旬に、一時的に地震回数の増加がみられました。
・山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤⑥）。
・⑤⑥の基線では、2022 年１月頃から 2023 年２月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024 年５月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。




○： 2022年１月１日～2026年９月30日
○： 2026年10月１日～2026年10月31日

図２　焼岳　山頂付近の地震の震源分布図（2022年１月１日～2026年10月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅1.0μm/s以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海抜０km以浅が震源と推定される地震のことです。
観測点の稼動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

・震源は、山頂付近の概ね深さ０km（海抜０km）以浅に分布しています。




図３　焼岳　山頂部及び南西斜面の状況
（上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ）
・噴気活動に特段の変化はありません。

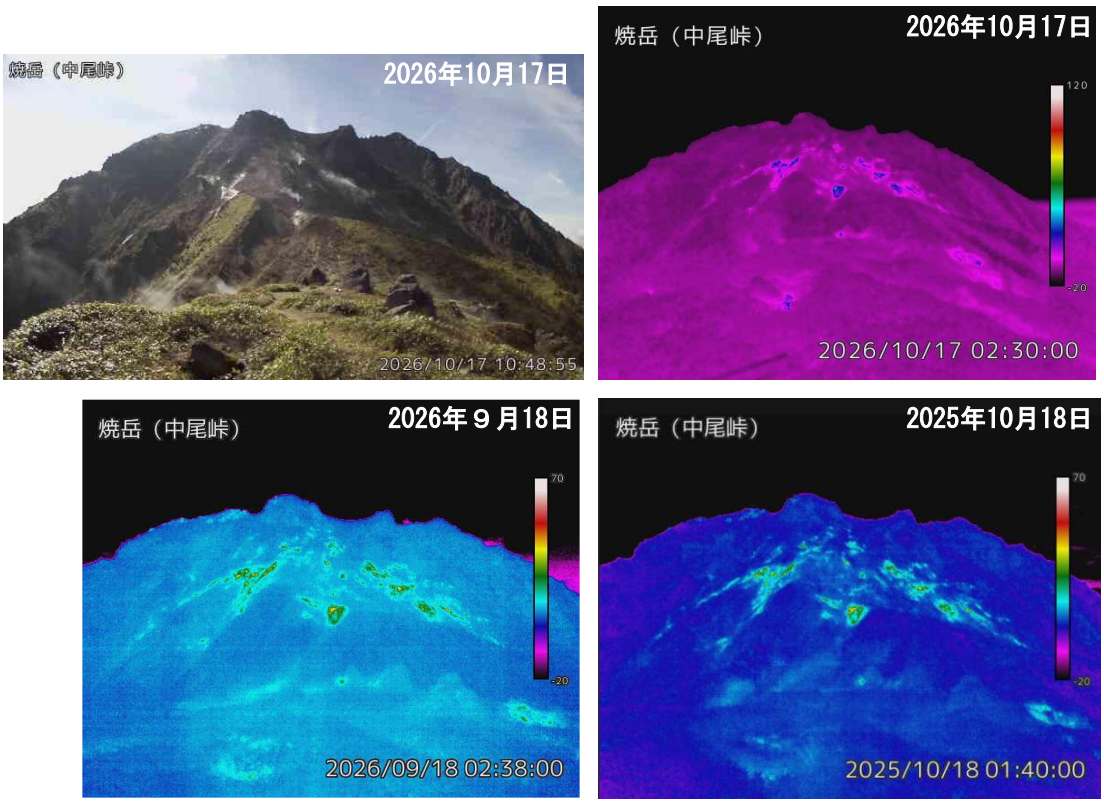
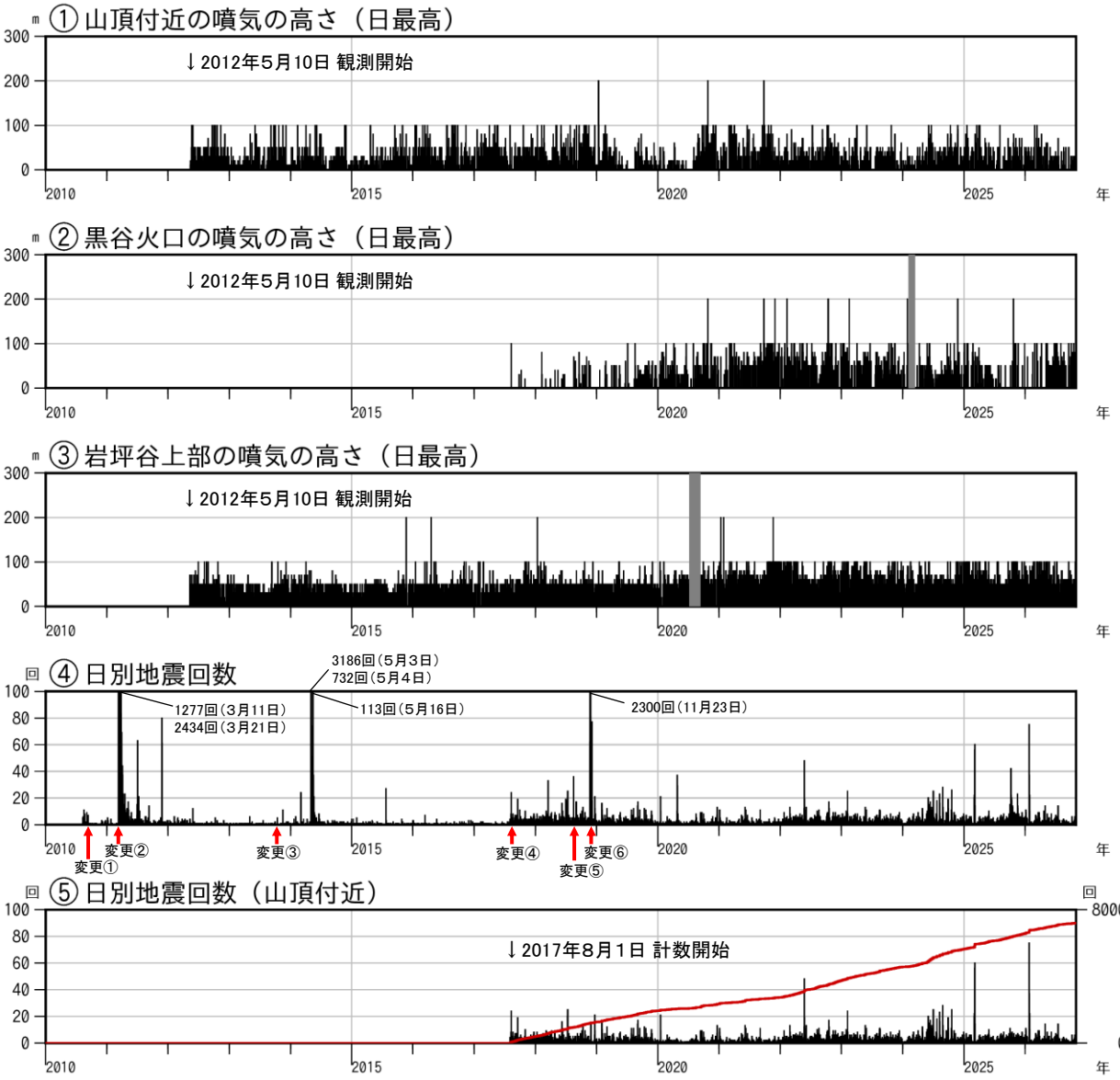



図４　焼岳　中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像
撮影場所と撮影方向は図 11 を参照。
・前月（左下図）及び前年同月（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。
・中尾峠監視カメラは 2026 年 10 月に機器更新をしています。




【地震の計数基準の変遷】

| | | |
|---|---|---|
| 開始　2010年8月2日～2010年9月21日 | 中尾上下動振幅0.5μm/s以上、S－P時間2.0秒以内 | |
| 変更①　2010年９月22日～2011年3月10日 | 中尾上下動振幅0.5μm/s以上、S－P時間1.0秒以内 | |
| 変更②　2011年３月11日～2013年9月30日 | 中尾上下動振幅3.0μm/s以上、S－P時間1.0秒以内 | |
| 変更③　2013年10月1日～2017年7月31日 | 中尾上下動振幅2.0μm/s以上、S－P時間1.0秒以内 | |
| | **山頂付近の地震**<br>（山頂付近が震源と推定される地震のうち、以下の基準を満たす地震） | **山頂付近以外の地震**<br>（山頂付近以外が震源と推定される地震のうち、以下の基準を満たす地震） |
| 変更④　2017年8月1日～2018年7月31日 | 中尾上下動振幅2.0μm/s以上及び南峰南東上下動振幅1.0μm/s以上、S－P1.0秒以内 | 中尾上下動振幅2.0μm/s以上及び南峰南東上下動振幅1.0μm/s以上、S－P1.0秒以内 |
| 変更⑤　2018年8月 1日～2018年11月23日 | 南峰南東上下動振幅1.0μm/s以上、S－P1.0秒以内 | 南峰南東上下動振幅1.0μm/s以上、S－P1.0秒以内 |
| 変更⑥　2018年11月24日～ | | 南峰南東上下動振幅30μm/s以上、S－P1.0秒以内 |

図５　焼岳　噴気の高さと地震回数の推移(2010 年８月２日～2026 年 10 月 31 日)

②黒谷火口の噴気の高さは、2024 年２月５日から３月 14 日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。

③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020 年７月７日から９月 10 日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。

④2017 年８月１日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。

⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。

・黒谷火口では、2017 年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019 年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

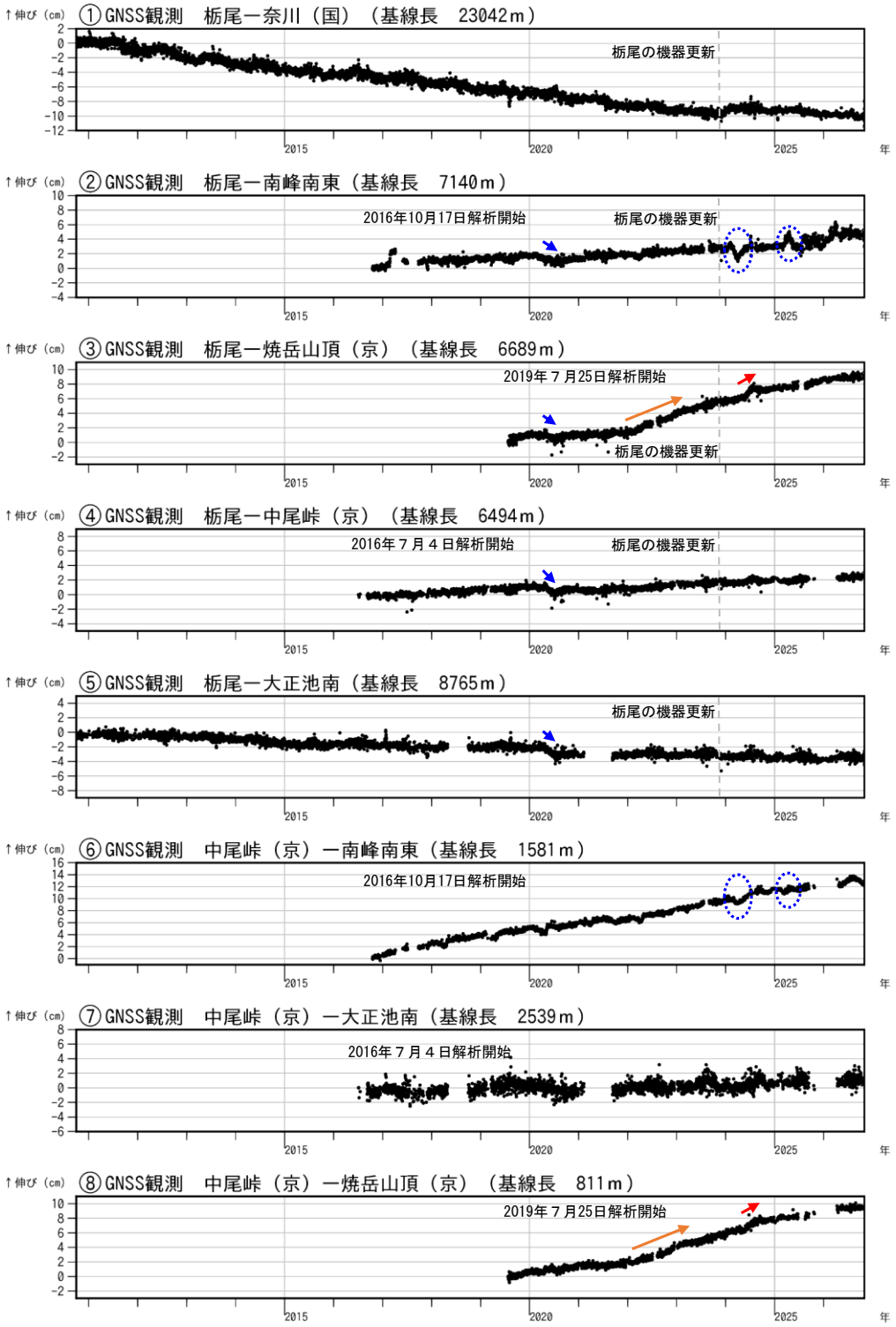



図６　焼岳　GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 10 月１日～2026 年 10 月 31 日）

・③⑥⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な伸びの変化が継続しています。
・③と⑧の基線では、2022 年１月頃から 2023 年２月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024 年５月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。
・②～⑤の基線では、2020 年５月下旬頃から 2020 年７月頃にかけて、2020 年４月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ　図６の説明）
図７の GNSS 基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。
2023 年 10 月 17 日の栃尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。
②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

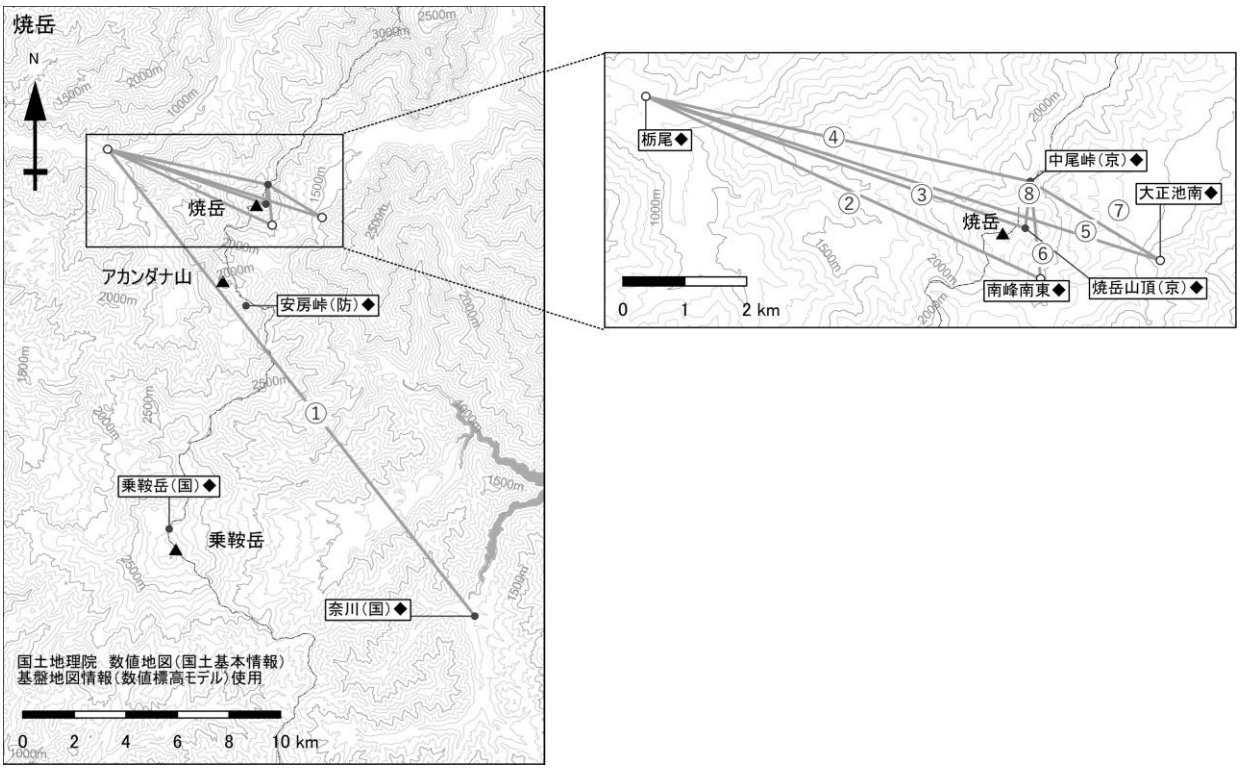



図７　焼岳　GNSS 連続観測点配置
白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
①～⑧は図６のGNSS基線①～⑧に対応しています。③⑥⑧は図１のGNSS基線⑥④⑤にも対応しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（京）：京都大学

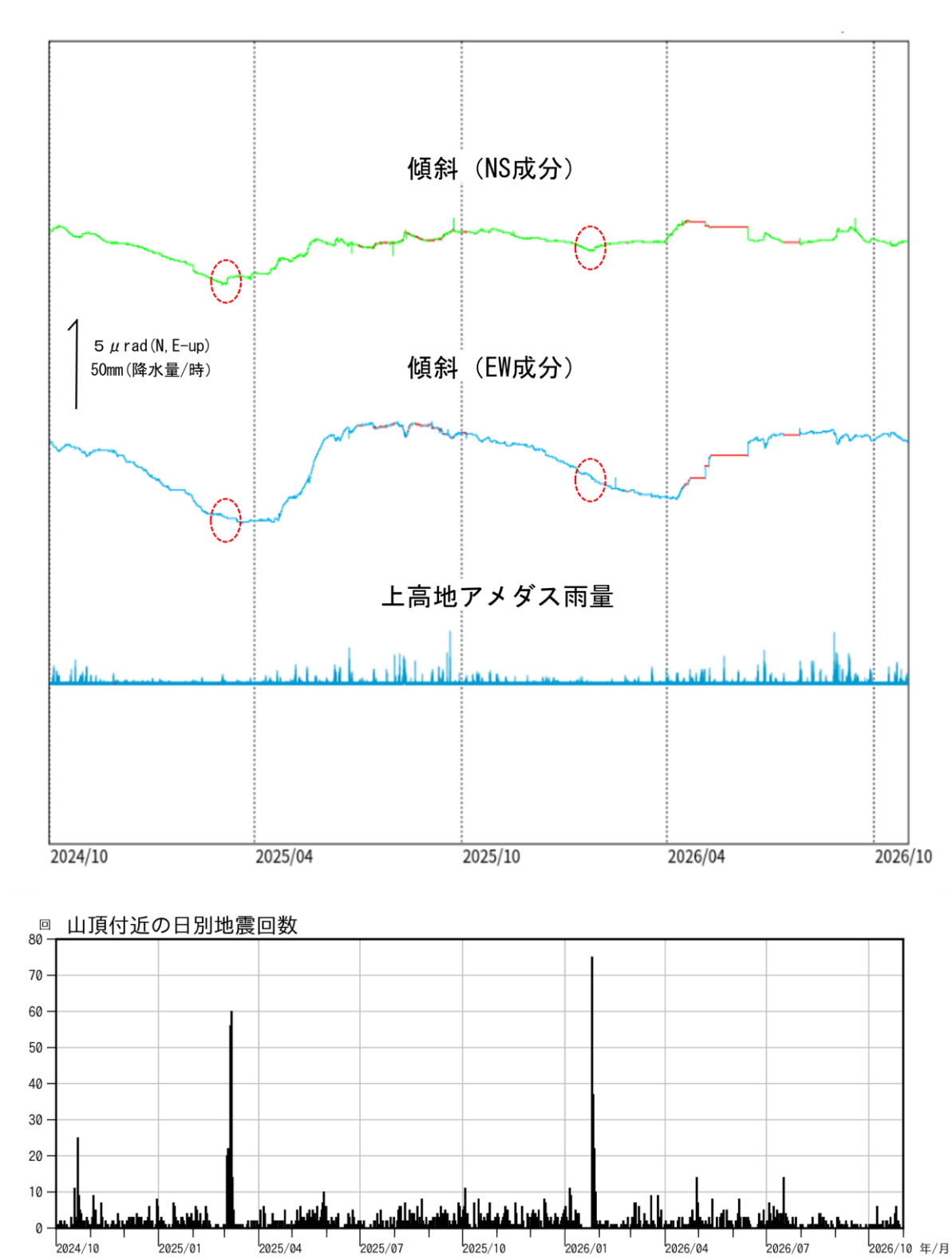



図８　焼岳　南峰南東観測点における傾斜データ及び日別地震回数
（2024 年 10 月１日～2026 年 10 月 31 日）
赤線部分は欠測を示します。

・傾斜計による観測では、2025 年３月８日、2026 年１月 25 日及び１月 27 日に山頂方向上がりを示すわずかな傾斜変動（赤破線）が認められました。その他の期間は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

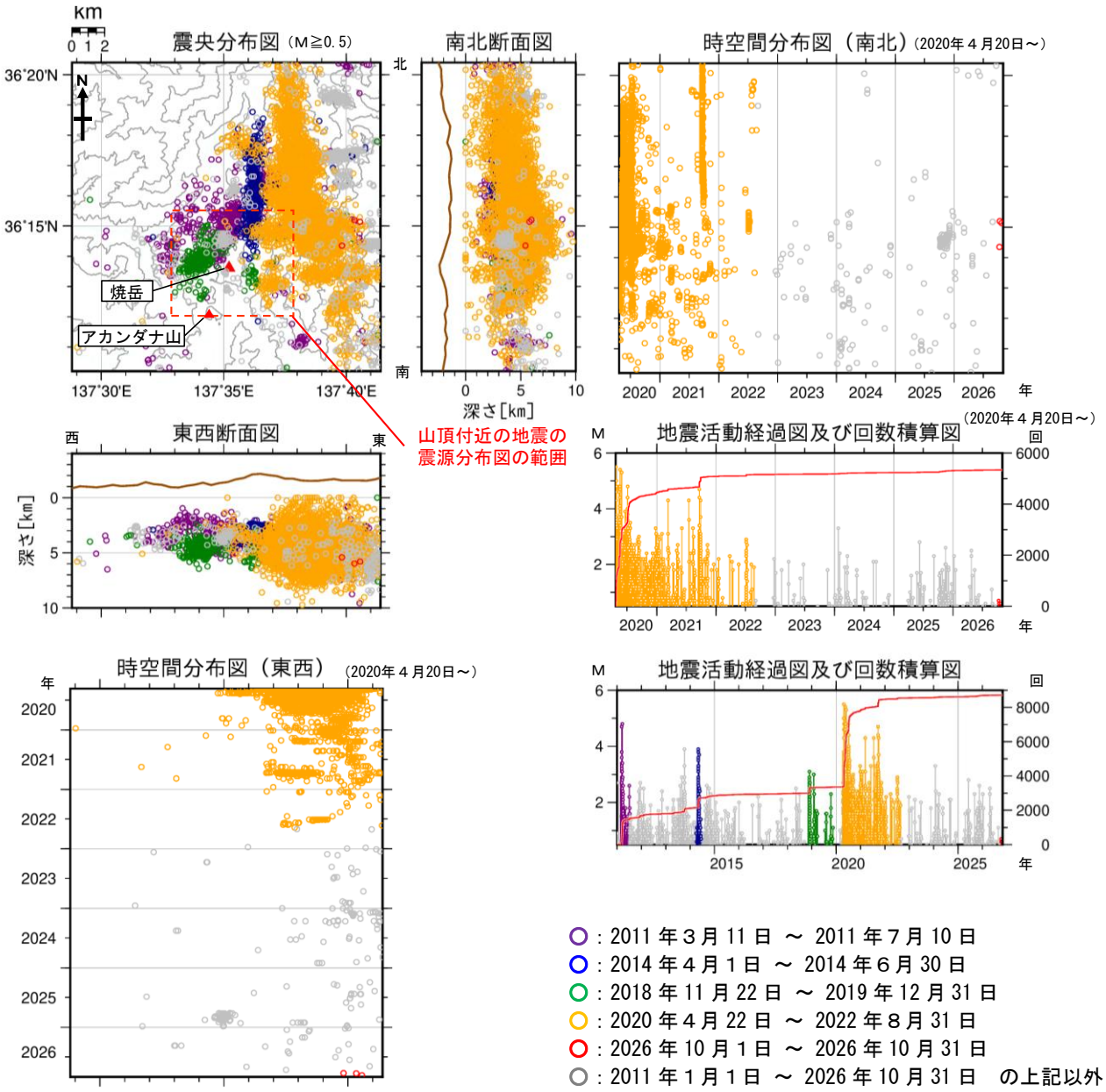



図９　焼岳　広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年１月１日～2026年10月31日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020 年９月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。
M（マグニチュード）は地震の規模を表します。
図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。
地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数（右軸）を示しています。
震央分布図中の赤破線領域は、図２で示す領域に対応しています。

・焼岳周辺では、2011 年（紫丸）、2014 年（青丸）、2018 年から 2019 年にかけて（緑丸）、2020 年４月から 2022 年８月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
・今期間、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

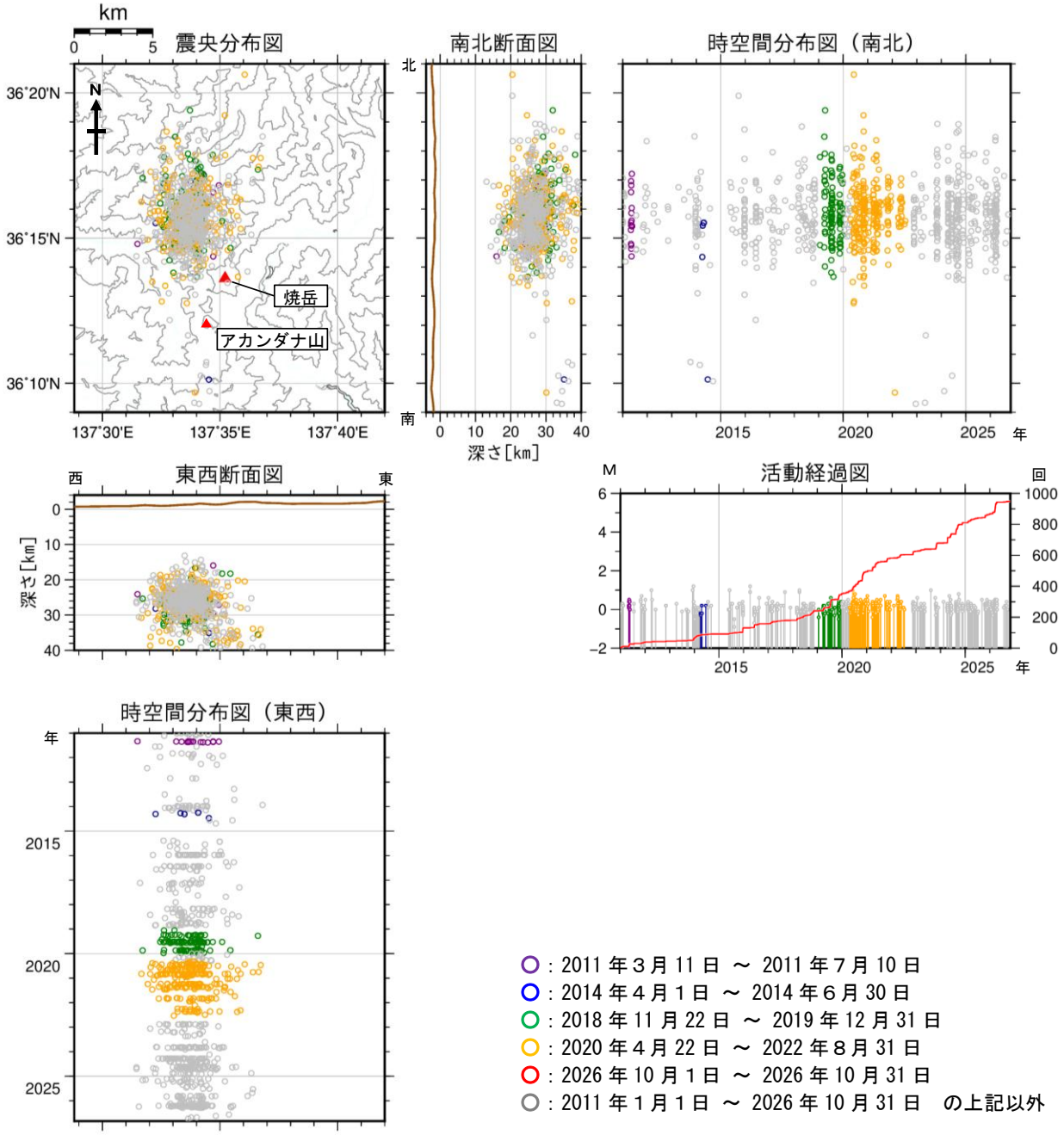
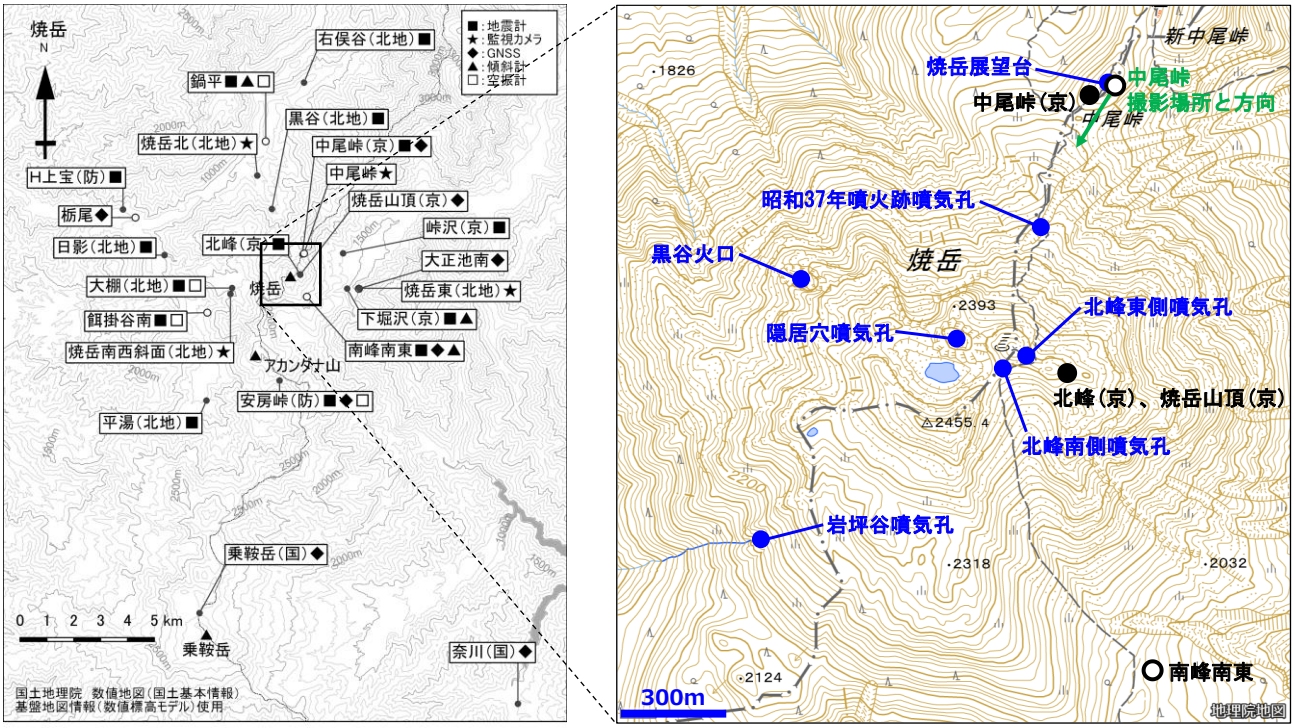



図10　焼岳　広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年１月１日～2026年10月31日）
広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020 年９月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。
M（マグニチュード）は地震の規模を表します。
図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

・焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化はみられません。
・図９に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加することがあります。




小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（北地）：北陸地方整備局、（京）：京都大学

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（京）：京都大学、（北地）：北陸地方整備局

図 11　焼岳　観測点配置及び噴気孔位置
右図中の緑矢印は図４の撮影位置と方向を示します。